

季節のおまつり

円座の羯鼓踊り

かんこ

三重県伊勢地方には江戸初期から念佛踊りの一種「羯鼓踊り」が伝わっている。その内の一つ円座町は、伊勢神宮の南西に位置し、宮川の清流に臨む農業を主とするこじんまりとした地区である。宮川沿いには神薙町という地区もあり、それらの名前からして古くから伊勢神宮と深い繫がりがあると言われている。

羯鼓とは小さな太鼓のことで、元々は雅楽の羯鼓に由来している。踊り手は



夕刻、正覚寺へ入場

お腹に白のさらしを巻き、首から太鼓を吊り下げて両手にバチを持って踊る。頭上には白毛の馬の尾から作ったシャグマと呼ばれる円筒形の被り物を肩までつぼりつけるので顔は見えない。その根元を赤い帯で締め、青と白の段々染めの着物をきて、腰には菅すげでできた腰蓑こしのみを着ける。日本的というよりも、どこか南方の島々から伝わった衣装のような気がしてくる。

別名シャグマ踊りと呼ばれるこの祭りは毎年八月十五日の夜に行われる。円座町は松坂市から車で約二十数分であるが、町に入つても細い道が幾つかあり、どこで祭りが行われるのかごく近くまで行かないと分からぬほど静かな村である。祭場となる正覚寺の広い境内の中央に柴や薪が積み上げられ点火されると、「松明」と呼ばれる炎が燃え盛り、法螺貝が吹かれ、鉦と太鼓が鳴らされる。やがて唄い手が数人、踊り手が二十人ほど松明を中心になつて音頭に合わせて踊りはじめめる。男子小学生から青年まで、子供は花笠をかぶり、初盆の供養と室内安全を願い、またこの地の豊作を願つて夜遅くまで踊り続ける。

(写真・文 宮本卯之助)



正覚寺境内の唄と踊り

祭りとともに

富士山本宮浅間大社 奥宮太鼓お納め



静岡県富士宮市を起点とする登山道の山頂には、富士山本宮浅間大社の奥宮が鎮座しています。開山期の七月二十三日、奥宮に新たな太鼓が奉納されました。当日はブルドーザーを使って山頂まで運ばれました。製作に際しては、厳しい気候条件に耐えうるよう、胴を厚くする、時間をかけて皮を張るなど、職人と担当者で意見を出し合い作り上げました。お納めされる場所で最良の音が響くよう、見極め、また調整するのは太鼓職人の腕の見せどころであります。

古くは平安時代に堂が建てられ、御神徳を押ししながら登拝されてきた富士山。靈峰にて宮本の太鼓の音が響きますこと、とても嬉しく存じます。



5代目 卯之助

神輿の製作

神輿むかしばなし

東京下町の祭礼は一段落いたしましたが、五穀豊穣を祝う秋祭礼や、来年、再来年の例大祭に向けて、神輿の修復、製作が続いています。今では年間一〇〇基以上の修復、製作を手がけておりますが、神輿を手がけるようになつたのは実は五代目卯之助の頃から。文久元（一八六一）年に太鼓店として創業、四代目の時に土浦から浅草に移転し、太鼓や曳太鼓を製作する中で、次第に信頼を得ながら、神輿も製作するようになりました。完成までに二十職もの職人の手を要しますが、浅草や近隣地域は職人が多い町でもあります。木地や漆塗、彫金など腕の良い職人たちが集まつたといいます。

五代目は各工程の職人たちをまとめあげ、神輿師として全体を統括しながら、台輪や蕨手などを江戸っ子好みの粋な様式に改良していきました。どこよりも格好良い神輿を作る、それはお客様にとつても神輿師にとつても、心浮き立つものであります。

古典芸能へのとびら

歌舞伎に使われる洋楽器

江戸時代から脈々と続く古典歌舞伎から、新たな試みを取り入れる新作歌舞伎まで、歌舞伎音楽には思いもよらない工夫が込められています。伝統的な日本楽器以外にも、様々な楽器が使われているのです。オーケストラ音楽の打楽器であるティンパニや、ラテン音楽で軽快なリズムを刻む民族楽器ギロやボンゴなどが挙げられます。また驚くことに、劇場では専門の演奏家が奏すると思いきや、ほとんどを鳴物の方が一手に担っています。

弊社では和太鼓作りの技術を生かして、世界各国の打楽器を手がける機会もあります。オーケストラ用のティンパニやボンゴは水牛やプラスチック製の皮が使われますが「和製ティンパニ」「和製ボンゴ」は馬皮です。弊社には、出番を待つ洋楽器がいくつも眠っています。



和製ボンゴ

日本の文化はどこから来て、どのように発展してきたのか。祭と伝統芸能に関わる者として、ここに尽きぬ興味があります。円座の羯鼓踊りで使われる素朴な羯鼓と、雅楽で用いられる極彩色の羯鼓。其々どのような歩みで現在の形に辿り着いたのか。支配者の歴史は多く語られる一方、民衆の歴史は知られざる部分が多く、そこにまたロマンを感じます。雅楽や能楽のように時の権力の庇護を受けた芸能と同じ時代に、在野の芸能が数多く存在し、時代の趨勢と共に芸能者の往来や交流があり、芸能が伝播また変化してきたのでしょうか。現代の和太鼓芸能の発展や古典芸能との交流も、そうした芸能の変遷の一幕なのだと思います。宮本はその発展を見つめ、陰から支えていける会社でありたいと思います。

代表取締役社長
宮本芳彦

行	發
株式会社宮本卯之助商店	企画広報室
〒111-1035	東京都台東区西浅草二丁目一
電話(03)3384-1224	www.miyanoto-unosuke.co.jp